

天狗の話

ある年の六月七日の朝五ツ半（七時）ごろ、文殊寺の和尚が、寺の小僧に徳利を持たせて酒を買いに元町まで行かせました。しかしいくら待っても帰ってこないの、不審に思つてあちこち尋ね、寺の前の松並木の所まで行くと、小僧に持たせた徳利が松の枝にかかつていて、小僧は見あたりません。ますます不審に思つて寺に帰って待つていると、小僧は夕方になって帰ってきました。和尚が叱りつけると、小僧は京都の祇園まつりを見て、今帰ってきたといひます。京まで行くには十四、五日もかかるのに、日帰りで行つてきたというのは大馬鹿ものだと叱りつけておきました。その後十日ほどたつて、西国へ行つて帰ってきた人が寺にきて、よもやま話をするうちに、さる7日の京都の祇園まつりで、この寺の小僧がさじきにいるのを見かけたが、ずいぶん早く帰つてきたものだといひます。和尚は小僧を呼び、祇園まつりの様子をくわしく尋ねたところ、いうことが少しも違つていません。どのようにして行つたのかと尋ねると、その日、徳利を持って松並木の中ほどまで行つたところ、向うから背の高い山伏がやつてきて、今日は祇園まつりだが見物しないかというのでついて行き、まつりを見てきたといひます。それを聞いた和尚は手を打ち、世の中には不思議な事もあるものだ、これは天狗の仕業に

ちがいないと、だれかれとなく話したので世に知れわたりました（『古今佐倉真佐子』より）。